

# 合気道人生〈37〉

## 我一生修行なり！

鈴木 茂

愛媛県合気道連盟理事長  
松山市合気道協会師範  
愛媛合気道会会长（前合氣会愛媛県支部）



秋山兄弟道場にて演武を行う筆者（左）

### 一、合気道を始めるきっかけと現在

私は現在満六十四歳、七段である。合気道は東京本部道場をかわきりに、東京、大阪、神戸、松山と渡り歩いた。今も週五回の稽古をしている。受けもパンパンとなる。周囲からはエネルギーの塊のように言われるが、現実には四十七歳のとき腎不全になり透析をする羽目に陥り、十二年間不自由な環境で稽古を続けてきたのである。そして五年前に腎臓移植を受けた。移植を受けた人はたくさんいるが、私ほど元気になった人は稀であると、移植医万波誠先生（宇和島徳州会病院）が驚かれている。手術に際し、「長い間透析した割には血管が痛んでいない」という説明を受けた。これも全て合気道の稽古のお蔭なり！ 合気道は素晴らしい！

私が合気道を始めるきっかけは、昭和四十一年十八歳で上京した時に、大学相撲で活躍していた

私の叔父（父の弟）が、合気道を紹介してくれたことである。それまでは柔道や拳法をかじつておらず、格闘技は好きであった。すぐには合気道を始めたところ、何か得たいの知れない魅力にとらわれ、以来半世紀を合気道一筋に稽古している。

昭和四十五年に卒業し、銀座に本社のある中堅商社に入社した。三年間は無我夢中で働いた。毎日朝五時に起きて、いの一番に出社して仕事をした。三年目には、全社で當業成績一番になっていた。一生懸命仕事をするなら、独立して自分の力を試してみたい気持ちになり、二十七歳で起業した。糾余曲折はあつたが今年九月で三十七期を終え、全期黒字を達成している。「合気道は腹を鍛え心を強くし、積極的な人生を送るための道なり！」と思い、ひたすら稽古に励んだお陰である。

昭和五十六年に会社の敷地に、合気道専用道場（六十畳）を建てた。現在、月・木・金・日は愛媛合気道会（前愛媛県支部）道場として使っている。また、NHKドラマ「坂の上の雲」の主人公の生誕地にある、秋山兄弟合気道道場でも稽古している。秋山兄弟道場は、明治二十八年に藩主久松家菩提寺の大林寺に、弟の秋山真之海軍中将が建てられたものであり、昭和二十四年に現在の場所に移築された。長年荒れ果てていたが、秋山兄弟の精神を受け継ぐ人材育成の場として、七年前に常盤同郷会（平松昇理事長）が中心になり改修して復活した。秋山真之海軍中将は、開祖植芝盛平翁と親交が深く、合気道の理解者であり門人で

もあつた。今から六年前に、中将の孫にあたる大石尚子参議院議員（神奈川県）が、是非この道場で合気道をといたい想いで合気道部開設を希望され、植芝守央道主や武田義信師範に相談された。お二人のご推举と理事長の信任を得て、私が火・金・土曜日に稽古している。

## 二、東京での合気道

昭和四十一年より四十五年夏まで、本部道場と大塚の小林道場で朝夕稽古を積んだ。本部入会時の旧道場は玄関をくぐると左側に事務所があり、開祖はこの事務所にたいてい座つておられた。小さな蓄音機で、遠藤実氏作曲の「花の合気道」をここにこしながら聴いていた。また事務所から出る際、身をかがめてカウンターをくぐるわけであるが、九州で活躍されている菅沼先生が、その時頭を打たないよう、いつもカウンターに手を添えておられた。

もうひとつ開祖の思い出がある。若先生の稽古にひよっこり来られ、門人はさつと正座し開祖に注目する。数人の弟子が開祖に向かう。その瞬間、身をかわし「エイー！」…

そうこうしている内に、おそらく加藤さん（？）と呼ばれた弟子に「何段かな」と尋ねられ、「四段です」と答えたところ、「五段だよ」と言われ、即座に昇段させたことが印象に残っている。

また同じく稽古中に開祖が来られ、高天原の神様の話をされた。真剣に聴いていた私の前に突然

上り下りした。あまりにも重く、一階で一呼吸をいれ一気に四階まで歯をくいしばつて上がる。そんな訳で無事に役目を終えた後、足の震えが止まなかつた。朝稽古の奥村繁信先生（九段）から、この件でいつもねぎらいの言葉をかけていただいだ。先生が亡くなるまで、上京して顔を合わす度に、話題はいつもこの話であつた。

奥村先生の思い出で、いまだに心に残つていることがある。先生は満州帝大（建国大学）の出身で、帝国陸軍として奉職した後、三年間シベリアに抑留された。帰国後は税務大学校の教官として教鞭をとられた。とにかく実直な先生で有名であった。そして大柄で背が高く、背筋をピンと伸ばし、軍人精神と古武士的な風貌をたたえ、物静かな文武にたけた哲学者であつた。



かつて共に朝稽古に励んだ奥村九段（右）と筆者（左）

来られ、開祖と目が合い、さつと導かれ、その瞬間にわくちやの手首が私の目の前に迫り、すどんと倒されてしまった。

植芝吉祥丸道主との思い出は、第二回中四国学生合氣道演武大会が愛媛県民館で行われた時、道主を尋ねてご挨拶申し上げたところ、「いやー鈴木君、君はここにいるのか、安心だ！」と言われた。和気藹々と控え室で歓談していたところ、ふと道主が腕相撲をしようと手を出され、お供の菅沼先生と三人で勝負した。道主は圧倒的に強かつた。やはり開祖の血筋はすごい！

小林道場では、奥村繁信師範、西尾昭二師範、黒岩洋志雄師範に学んだ。現在の明道館である。

道場主は資産家の小林さんで、学生が合宿する伊豆の観音温泉道場は、小林さんの娘の経営であり、私も二回伺つた。そして、道場長は長山大乗先生であつた。道場には二階に四畳半の汚い部屋があり、私は住込み弟子を探しているのを聞きつけ、周りの反対を押し切つて弟子になり、各先生のお世話をせよと受け持つた。当時住込みとして一万五千円（月）を頂けたのは、学生の私には非常に魅力的であつた。

長山大乗先生は、元平和相互銀行の支店長までされた人で、世間ではすこぶる厳格な方という評判であった。朝稽古は、月・水・金で、私は朝六時前に起きて道場の掃除をする。ところが重箱の隅をつつくがごとく、必ずゴミや拭き残しを見つけて小言を言う。しかし稽古が終わつて「君はよくやつていてアジの開きが出た。先生はにこやかに身を食べたのち、そのアジを私の前に置き、「若い者は骨を食べんといかん」と言われ頭から無理やり食べさせられた。小言も言われたが、茶目っ氣のある信頼のできる先生であつた。この時朝食は、たいていアジの開きが出た。先生はにこやかに身を食べたのち、そのアジを私の前に置き、「若い者は骨を食べんといかん」と言われ頭から無理やり食べさせられた。小言も言われたが、茶目っ氣のある信頼のできる先生であつた。この時

の厳しい指導は、私の人生において非常に役立つていて、しばしば自宅へ朝食に誘つて下さつた。朝食は、たいていアジの開きが出た。先生はにこやかに身を食べたのち、そのアジを私の前に置き、「若い者は骨を食べんといかん」と言われ頭から無理やり食べさせられた。小言も言われたが、茶目っ氣のある信頼のできる先生であつた。この時



植芝吉祥丸二代道主の指導を受ける

今日は稽古は無いだろうと寝ていたら「鈴木さん起きなさい、稽古ですよ」と声をかけられた。用賀にお住まいの先生は、なんと朝三時前に起きて歩いて来たのである。その日は一人だけの稽古であるにもかかわらず、準備体操、木刀の振り、基本技という順に、日頃と変わりなく稽古した。

夜稽古は、火・水・木だった。担当は、西尾昭二師範と黒岩洋志雄師範であった。西尾師範は、早くて銳く無駄の無い動きで私を魅了した。黒岩師範は、合気道を物理学的に解説して面白かった。

## 三、大阪・神戸時代

昭和四十五年夏から四十七年夏まで、大阪・神戸支店勤務となつた。大阪では大阪合気会吹田道場に通つた。田中万川師範の内弟子で河原幸男先生とは気が合つて、しばしば一階の部屋でめざしを焼いて酒を飲んだものである。河原先生は私が稽古に行くと愛想よく、強烈な四方投げや入り身投げをかけられた。私は頭を打たないように受け取るのが精一杯であつた。

神戸では、小林裕和先生の灘道場に通つた。道場長は藤谷美也子さんである。彼女は美しく優雅な方であるが、稽古に関しては、負けず嫌いで頑張り屋であったと思う。後に有名なスティーブン・セガール氏の奥さんになつた。小林先生は誕生日会や合宿を上手に企画され、夏には小豆島で合宿をした。腕の太い先生で、諸手取り呼吸技と裏返

しの二教は心に残つてゐる。

## 四、愛媛県支部と西尾師範とヨーロッパ

昭和四十七年秋には、愛媛へ転勤となり松山に住んだ。松山には合気会の愛媛県支部があり、初代支部長は吉岡慎吾先生（県会議員）であり、二代目支部長は吉岡勇夫先生であつた。松山先生は合気道の普及に尽力され、松山大学に合気道部を設立された。三代目は不詳私である。

当時松隈支部長には昇段権がなく、お隣りの高知県より佐柳孝一師範をお招きして昇段審査を行つており、本部との昇段手続きは佐柳師範が担当されていた。その後、佐柳師範のご都合で県支部に来られなくなつたので、松隈支部長は、今後の運営方針を思案され、昇段権のある誠実な先生の選定がなされた。

西尾師範とはヨーロッパ各地を共に巡回した

紹介を私に頼んだ。私は、東京時代の先生で本部の西尾昭二先生が、道主の依頼により広島に稽古に来られていることを知っていた。松隈支部長に紹介したところ両先生は意気投合され、それ以後西尾先生が松山で稽古することになった。その後松隈支部長が病気のため退任される際、私を道主に推薦され、支部長をお受けした次第である。

西尾先生は大蔵省印刷局の合氣道部を創設された方で、印刷局退職後も合氣道の普及に尽力された。私は先生が五十六歳（一九八三年）から六十歳（一九九五年）までの間、先生の助手としてヨーロッパ各国へお供をさせていただいた。

最初は先生の弟子が活躍する北欧に出かけた。デンマーク・フィンランドには市村師範、スウェーデンには富田師範がおられた。数年間の北欧講習を経て、一九八九年にはフランスのFFAAA（マキシム・ドローム会長）の招待により、パリ、ストラスブルグ、ミルーズで三週間の講習会をもつた。またリヨン、マルセイユをはじめ、アルビニオン、ニース、サーフアファイルなど三年かけて各地を巡回した。その稽古には、フランス在住の田村師範やヨーロッパで有名なクリスチャンティシエ師範が参加して下さった。

その後十五年を経て、田辺で開催された二〇〇八年第十回国際合氣道大会のとき、田村師範やティシエ師範にお目にかかれたのは、大変懐かしく嬉しかった。またスウェーデンの稽古仲間ケネス親子にも再会し、大会後来松され我が道場で共に

稽古をして友好を深めた。

余談ではあるが、FFAAAの指導者のポールミラー氏は、ストラスブルグ大学の教授であった。私の次男がこのご縁でストラスブルグ大学へ一年間語学留学した。その後次男の通っていた愛大が、フランスのナント工科大学と姉妹提携を結んだため、交換留学生としてナントへ行った。帰国後は某自動車メーカーに勤務している。私には二人の息子がいて、長男は大学の合氣道部で活躍したお陰で、大手通信建設会社に就職できた。合氣道様様である。また長男の息子達（私の孫）三人が合氣道をしている。まさに三代にわたる合氣道一家である。私の祖父も海軍機関学校出身であり、舞鶴にいた。子どもの頃、祖父に小手返しでころころ転がされたことを思うと、祖父も合氣道をしていたのかもしれない。

話を元に戻すが、北欧で最初の稽古地は、フィンランド・デンマークであり、都合一週間の講習会最終日に、演武会を開いた。その後、寝泊りしていた体育館でパーティーを催した。各国から集まつた人達が、お国のお酒や食べ物を持ち寄り、稽古や演武会の成果等、話が尽きなかつた。宴も盛り上がり、歌や踊りが飛び出した。特に愉快であつたのは、オランダグループの「西瓜の歌」という踊りであった。六人ほどの大柄な男女が、手をお乳の下に当てて大きく揺すりながら「すいか」と叫びながら踊り、大変盛り上がり大笑いした。この時まさに、植芝開祖が始められた合

氣道を通して、世界が一つになる幸せを実感した。またフランスでは、パリ警察の署長をしており、パリ警察のバトカーで送つていただいた。サインを鳴らしてスイスイと飛ばした。合氣道をしているとびっくり仰天、めつたにない経験がでかい、心の中で「日本万歳！」と叫んだ。うちダンサーが前にせり出して、西尾先生の頭がすっぽりスカートの中に入つてしまい、「弱つちやつたよー」と叫んだ先生の横顔が、今だに思い浮かぶ。

帰路につくため飛行場に向かう道は混雑してお

り、パリ警察のバトカーで送つていただいた。サインを鳴らしてスイスイと飛ばした。合氣道をしていた。会議では、つねづね県単位の合氣道連盟設立の要望があった。また愛媛県においても連盟発足の要請があった。

私は毎年、支部連絡会議と鏡開きに参加している。会議では、つねづね県単位の合氣道連盟設立の要望があった。また愛媛県においても連盟発足の要請があった。

県では毎年県武道館において鏡開き式を行つて

いる。私は合氣会愛媛県支部長として、「是非合氣道も参加させていただきたい」と、野中忠一県スポーツ振興事業団常務理事へお願いしていた。当時の県文部顧問の井関農機株井関昌孝社長のお力添えもあり、昭和六十三年に合氣道として初めて



愛媛県武道館鏡開き式で西尾師範の受けをとる筆者

て鏡開き式に参加することができた。その年の演武は西尾昭二師範と鈴木茂によるものであった。その後しばらくして、県支部のみの参加はいかがなものか……と、松山鍊成会松森会長より話があり、協議の結果、県内の他道場も参加できるよう計らつた。ところが県側は窓口が煩雑になり事務的な不便が生じたため、連盟を作つて窓口を一本化してほしいとの要請があつた。早速、主な県内道場の代表者で設立委員会を設け賛同を得て、二〇〇四年七月四日松森國彦会長のもと県合氣道連盟は発足した。しばらくして県体育協会にも加盟した。

また発足の記念行事として、二〇〇五年四月十七日に植芝守央道主をお招きして、道主講習会を

開催した。これをきっかけに、毎年四月には本部道場より師範をお招きして開催する、本部講習会が定着し会員の技術向上と交流の場となつてゐる。県連盟の年間行事としては、一月愛媛県鏡開き式、初稽古・四月本部師範講習会・六月県連盟演武大会・八月県連盟鍊成大会を、それぞれ県武道館にて開催している。その他連盟の各道場代表が、毎年全日本合氣道連盟演武大会に参加している。

## 六、愛媛合氣道会になる

私自身も、指導のために来松された各先生に学ぶことが多く、「これはいたただきだなあー」と気付くことがたくさんある。他にも奥村先生の縁で佐々木将人師範八段と面識を得て、只今、只今の乾舟哲学を猛勉強中である。また秋山兄弟合氣道道場の縁で、武田義信師範八段の受けを取らせて頂いている。誠に感謝感激である。「我一生修行なり！」

現在支部には、庄太六段・重越六段・不動六段・在間六段・石崎六段・大谷五段・上村四段・隈川四段・向井四段・山下三段・鶴籠三段・鈴木三段・私鈴木茂七段を含め多くの指導者が支部及び出先道場で活躍している。国際的に、デンマーク・オーデンス合氣会やインドネシア、ジョグジャカルタ合氣会とも姉妹提携して、交流を重ねている。最後に地域の活動として、毎年端午の節句には少年部の会員と共に、伊予豆比古命神社（椿神社）本殿で奉納演武を行つてゐる。また愛媛新聞社（



愛媛県連盟発足を祝う会にて  
前列右2人目から筆者、中村時広愛媛県知事、道主、松森会長、橋田副会長